

漱石をめぐる闘争

－「木曜会」共同体にみるホモソーシャルな関係性－

椎名 健人

問題意識・先行研究

明治・大正時代の作家、夏目漱石(1867～1916)は我が国の代表的な小説家の一人として、今なお高い知名度を誇っており、彼の遺した一連の作品群は国文学研究をはじめとする様々な学問領域において頻繁に研究対象となり続けてきた。

漱石の人物像に関する批評ないし研究に目を向けると、漱石の門下生であった小宮豊隆、森田草平らが活発に活動していた戦前までは、最初の漱石評伝とされる赤木桁平の『夏目漱石』を皮切りに、漱石の人物像と作品傾向を結び付けて語る人格主義的な見地の評伝(小宮豊隆『夏目漱石』;森田草平『夏目漱石』)が多くを占めたものの、戦後には江藤淳『夏目漱石』(1950)を一つの画期として、漱石を明治期の一知識人として捉え、漱石の作品及び人物と明治期日本の社会を関連づける形の漱石研究が盛んに行われるようになった。

ただしこれらの漱石研究のほとんどは、文学研究及び文芸批評の領域に留まっており、社会学の見地に立った分析ではない。社会学の見地から漱石を扱った代表的な研究としては作田啓一『個人主義の運命』、亀山佳明『「夏目漱石と個人主義」―<自立>の個人主義から<他律>の個人主義へ』を挙げることができるが、これらはいずれも漱石作品を題材とした議論の域に留まっており、本稿が関心を持っているような、漱石とその弟子たちとの師弟関係や、漱石一門の形成していた共同体(≒木曜会)そのものの性質や歴史的意義をホモソーシャルという観点から社会的に考察した研究ではない。

漱石とその弟子の関係性について扱った研究自体はこれまでに少なくない数が存在する。特に晩年の弟子であった芥川龍之介と漱石との師弟関係については吉田精一『芥川龍之介』をはじめとする国文学の見地に立った芥川研究の中で常に大きな関心が向けられ続けてきたのみならず、その背後に日本近代文学史の展望までが読み込まれる形で(石割 2000)が指摘するようにならばしばしば神話化されて語られてきた。他にも内田百閒、野上弥生子など、漱石門下の作家がその作品や人物についてそれぞれ論じられる時、師である漱石との関係やそれがもたらした文学的影響について言及されるケースも見られる。だが、これらはいくまで漱石と特定の門弟一人の間における関係性に注目したものであり、漱石一門の形成していた共同体(≒木曜会)そのものの研究ではない。

また、ホモソーシャルの観点から漱石を扱った文学研究としては大橋洋一『クイア・フェーザーの夢、クイアネイションの夢 ―『こころ』とホモソーシャル―』、森本隆子『『行人』論 ロマンチッククラブの敗退とホモソーシャルリティの忌避』などを挙げることもできるほ

か、ホモソーシャル概念が提唱される以前にも作田啓一『個人主義の運命』がジラールの欲望の三角形の枠組みを用いながら『こころ』における三角関係の分析を行っている。しかし、これらは全て漱石の作品を題材にした分析であり、やはり本稿が関心を持っているような、漱石とその弟子たちとの師弟関係や、漱石一門の形成していた共同体(≒木曜会)そのものの性質や歴史的意義をホモソーシャルという観点から社会的に考察した研究とは異なる。

そこで、本稿では漱石の生前に門弟らが形成していた共同体の歴史的意義を考察したい。

まず第1章では、漱石の弟子を、世代ごとに大きく三つに分けたうえでそれぞれの特徴を考察し、本稿で主に論じる対象となるのが1903年～1909年頃に漱石に弟子入りした「第二世代」の門弟ら(=「木曜会」共同体)であることを述べる。

第2章では漱石と「木曜会」共同体の間に芽生えた同性同士の緊密な関係性について分析を行い、イヴ・セジウィックの『男同士の絆』における議論も参照しながら「木曜会」共同体の性質について「ホモソーシャル」というキーワードを用いて考える。

第3章では漱石の妻、夏目鏡子と「木曜会」共同体の関係性について考察し、鏡子が「木曜会」共同体にとって排除と嫌悪の対象となった過程から、「木曜会」共同体の(ホモソーシャル性に伴う)ミソジニー性について分析する。

第4章では「日本型ホモソーシャル」、さらには「明治期日本の学生・知識人文化におけるホモソーシャル」という観点から「木曜会」共同体の性質を捉え直し、「木曜会」共同体の活動時期である1900年代初頭における日本の学生文化のホモソーシャルについて考察を行う。

漱石とその弟子たちによる会談の場であった「木曜会」は、日本の文化史上希に見る「知的サロン」であったとも言われる(森 1963: 426)。当時の日本の文学者・知識人界においては、「木曜会」の他にも島崎藤村、田山花袋、柳田国男らによる龍土会や上田敏、木下杢太郎、北原白秋ら耽美派的傾向を持った文学者・芸術家らによる「パンの会」などのサロンの共同体が立ち上がっており、「サロンの季節」(三好 1993: 9)とも評される状況が生まれていた。

こういった潮流を、P.ブルデューが『芸術の規則』で提唱した「場」の概念に基づいて解釈するのであれば、「サロンの季節」はつまりわが国における文学場の誕生であり、「木曜会」は日本における文学場内部において正統性を巡る闘争を繰り広げる党派の一つであると考えられることもできる。「木曜会」を中心に営まれた漱石とその弟子たちによる関係性は、近代日本の知識人の世界における師弟関係の雛形であり、同時に我が国における文学界、知識人界の構造の雛形であると考えることが可能である。

「木曜会」共同体の性質に関する研究考察である本稿の議論は、単に従来少なかった視点からの漱石研究であるに留まらず、知識人界及び文学場に関する文化研究という視点を提供するものであると考える。

第1章 弟子たちの世代区分

1-1. 三世代の特性

本稿が漱石の弟子たち及び彼らが織りなしていた共同体についての研究考察であることは既に述べたが、本筋の議論に入る前にそもそも本稿における「師弟関係」とはどういった関係性

を指すものであるかを確認しておきたい。

単純に「教える者」と「教えられる者」という関係性を考えるのであれば、まず想定されるのは「学校の先生と生徒」という間柄である。しかし、単に学校の先生と生徒というだけではあくまで制度的な関係性に過ぎず、「師弟関係」の要件を満たすには充分ではないだろう。

「師弟関係」といった場合に想定されるのは、「教える者」による体系的な知識や技能の伝達のみならず、それを通して伝えられる師の物の見方、考え方、時には師の立ち振る舞いや話し方なども含めた、師のパーソナリティと一体化した世界との出会いとして経験されるような関係であると言われる(稲垣 2011: 248)。ここではそのような包括的な関係を「師弟関係」と定義したい。

また、一口に「漱石の弟子」といってもその年齢層は幅広く、世代ごとに漱石との関わり方も異なる(例えば 1890 年代後半に第五高等学校の生徒として漱石と知り合った寺田寅彦と、漱石が死去する前年に初めて漱石山房の門を叩いた芥川龍之介とでは、同じ「漱石の弟子」とはいえ、漱石との関係性に大きな違いがあるのは当然のことであろう)。

そこで以下の(i・ii・iii)では、漱石の弟子を、漱石と出会った時期ごとに大きく三つの世代に分類し、それぞれの世代ごとの特色や漱石との関係性を分析する。

i 熊本時代(第一世代)

漱石にとっての初めての「弟子」といえる存在は、彼が東京帝国大学卒業後、第五高等学校に勤務していた時期の教え子であった学生たちである。

第五高等学校時代に漱石の教え子であった寺田寅彦と坂本雪鳥、厨川千江、平川草江、蒲生紫川らは、1898 年 10 月、当時の五高の関係者を中心に夏目漱石を主宰とする俳句同人「紫溟吟社」を結成した(熊本日日新聞社 1982: 418)。漱石を慕う教え子たちが学校外で創作集団的な組織を形成するという動きは、後の「木曜会」にも通じるものであるといえるが、結成時のメンバーである寺田らが五高を卒業し、さらには 1900 年に漱石がイギリス留学のため熊本を離れると活動は下火になり、機関誌『銀杏』も 1902 年に発行された第 11 号を最後に休刊する(熊本日日新聞社 1982: 418)など、活動は比較的短命に終わった。

「紫溟吟社」結成者の内、多くが漱石のイギリス留学を最後に漱石との関係を自然消滅させていく中、寺田寅彦は漱石がイギリスから帰国して一高・東大の講師に着任する 1903 年にはすでに東京帝大の学生として東京に在住しており、以後も漱石の死まで非常に親密であり続けた(原武,海老井,石田 2014: 178-179)。森田草平は、寺田と漱石の親密な関係について「もし故先生とその弟子との間に他に見られないような、特別の情誼があったとすれば、その俑を作ったものは吉村さんⁱⁱである。他は、小宮、鈴木、野上、それから私にしても、皆それにならったものにほかならない」(森田 1980: 63)と述べ、深い「情誼」をもって弟子に接するという漱石のあり方を決定付けた重要な人物として寺田の存在を挙げている。森田は自らも含めた数多くの漱石の弟子の中でも、寺田を「先生のほうからも一種の尊敬と愛情を交えた感情で遇されていた方」(森田 1980: 129)として別格視しており、この記述からは、漱石の弟子でありながらある面では漱石と対等の友人としての役割を果たした寺田の特殊性がうかがわれる。

ii 一高・東大講師時代(第二世代)

漱石が一高・東大の講師に着任してから修善寺の大患直前までの1903年～1909年は、漱石が『吾輩は猫である』(1905年)を『ホトトギス』誌上に発表して文壇にデビューを果たし、やがて小説家として生きることを決意した時期にあたり、「作家漱石」を考えるうえで極めて重要な時代である。

この時期に東京帝国大学に在籍していた野間真綱、野村伝四、中川芳太郎、野上豊一郎、小宮豊隆、森田草平、鈴木三重吉、安部能成、阿部次郎などは、一高・東大の講師であった漱石と学校制度上の「師弟」であった一方、個人的に漱石の自宅を訪問し、漱石と文学に関する議論を交わす、漱石に自作の詩や小説の論評を願い出るなど、大学の外で漱石とよりパーソナルで濃密な関係を結んだ。漱石の自宅を訪問する弟子の数が一気に膨れ上がったのもこの頃で、あまりに頻繁な来客に困った漱石に対し、鈴木三重吉が毎週木曜日のみを面会日とすることを提案した(原武,海老井,石田 2014: 292)ために、1906年10月からは通称「木曜会」といわれる、漱石と弟子たちの定例会談の場が発足した(原武,海老井,石田 2014: 292)。「木曜会」は1916年に漱石が死去するまでの10年間、絶えることなく存続するが、「木曜会」の中心メンバーから「第二世代」の弟子たちが消え去ることは最後までなく(森田 1980b: 3)いわゆる「世代交代」といった現象は生じていなかったと思われる。

「第二世代」の代表的な人物の一人である森田草平は、自分たちの世代の弟子、中でも特に小宮豊隆と鈴木三重吉について「かれらは自分達だけで先生を占有したような気持ちになっていた。切言すれば、自分達だけで占有して、他は寄せつけない、他の寄りつくことを好まないような傾向もあった」(森田 1980b: 358-359)と指摘し、内田百閒など、修善寺の大患以後に「木曜会」のメンバーとなった弟子たちは小宮・鈴木を「畏敬しながらも、内心烟ったく思っていた」(森田 1980b: 358-359)と述べている。また森田は漱石の死後、多くの人間から森田ら「第二世代」の漱石への独占欲があまりに強く、そのせいで若い世代は漱石に近付きにくかったという指摘を受けた(森田 1980b: 358-359)と回想している。

「第二世代」は、「第一世代」の寺田寅彦という例外を除けば)全世代を通じて最も漱石に近く、長く仕えた弟子たちであるが、この世代から後に漱石と対等の友人や仕事相手となったものは現われていない。寺田たち「第一世代」の門弟より5～10歳ほど若い「第二世代」の弟子たちと漱石との関係性は、最後まで一貫して「師匠と弟子」のそれであり続けたといえる。

iii 修善寺の大患～晩年(第三世代)

「第二世代」よりもさらに5年から10年ほど遅れ、修善寺の大患(漱石が1910年6月に伊豆の修善寺で大吐血し、一時人事不省の状態に陥った事件)以降に漱石山房の門を叩き、漱石に弟子入りした人間としては内田百閒、津田青楓、和辻哲郎、江口渙、芥川龍之介、久米正雄、松岡譲、岡榮一郎などの名が挙がる。

この世代からは後年に「新思潮派」として文壇で一時代を築いた芥川、久米、菊池らの他にも内田百閒、江口渙などの個性的な小説家が輩出され、大正期の文壇においては一定の活躍を見せてはいたが、現在に至るまで高い評価を受けているのは芥川、菊池あたりに留まっており、「新思潮派」を除いては党派的な活動の類も活発ではない。

いわば「第三世代」ともいえるこの世代の弟子にまつわるエピソードを挙げるのであれば、久米正雄と松岡譲が漱石の長女、筆子の愛を巡って対立し、松岡と筆子の結婚後、久米が小説『破船』で松岡を中傷した、いわゆる「破船」事件が有名であるが、「第二世代」の弟子にしばしば見られたような、漱石本人に対する独占欲を剥き出しにした類の言動はこの世代からはさして観察されない。

先述の森田の指摘にある通り、この世代にとって、「木曜会」の中心メンバーとして幅を利かせる「第二世代」の弟子達、特に小宮豊隆の存在は時に「烟ったい」ものだったようで、内田百閒が漱石を神格化して語る小宮を皮肉交じりに「漱石神社の神主」とあだ名した(内田 1987: 265-266)ⁱⁱⁱ⁾ことは広く知られている。また江口渙も小宮豊隆のことを、漱石を神格化するあまり事実の歪曲すら厭わない人間であると強く批判しており(江口 1989: 39)^{iv)}、こういった「第三世代」の態度からは、小宮ら「第二世代」の行き過ぎた漱石崇拜をある種の反面教師として、漱石を尊敬しながらも師との心理的距離を適度にとるという独自の態度が見え隠れしている。江藤淳のデビュー作『夏目漱石』の冒頭では、小宮豊隆ら漱石を尊敬するあまり神格化して語る弟子たちのあり方について痛烈な批判が加えられている(江藤 1984: 13)^{v)}が、「第三世代」の内田、江口らは、実際に漱石の教えを受けた直系の弟子でありながら、漱石を過度に神格化する態度への批判的視点も合わせ持つ集団である。

1-2. 第二世代と「木曜会」共同体

ここまで大まかな分類を行ってきたが、これら第一世代～第三世代の中でもっとも漱石に長く、近く仕えたのは、先にも触れたように、漱石が一高・東大の講師として着任してから修善寺の大患までの期間(1903年～1909年)に漱石に弟子入りした「第二世代」の門弟たちである。彼らは1906年10月に発足した漱石と弟子らの定例会談(通称「木曜会」)の創設時メンバーであるだけでなく、1916年の漱石の死に至るまで「木曜会」の中心であり続けた。

また、「第二世代」の中でも中心的存在であった小宮豊隆、森田草平、安部能成、阿部次郎らは漱石に託されて朝日新聞文芸欄(1909年～1910年まで存続)の運営を事実上独占的に行っていた(森田 1980c: 257)^{vi)}。当時の朝日新聞文芸欄は、『三田文学』、『スバル』などの重鎮であった森鷗外から「スバルや三田文学が退治させられそうな勢いである」とコメントされるなど、当時の文壇における小説発表の場として一定の影響力を保持する一方、「文芸欄の性質は文学、美術、音楽、なんでもよし。ハイカラな雑報風なものでも、純正な批評でもいいとして可成多方面にわたって、変化を求めている」(夏目 1928: 633)という漱石の言葉通り、扱うジャンルは文芸批評から音楽、絵画、彫刻、建築、能楽評にまで及んでいた。朝日新聞文芸欄に見られたあからさまな反自然主義的傾向(阿部次郎『自ら知らざる自然主義者』に代表される、自然主義派への明確な攻撃的姿勢を帯びた紙面は一貫して同文芸欄の基調を成していた)、そしてそれが実際に読売新聞文芸欄・『早稲田文学』・『文章世界』などを拠点とする自然主義陣営の動揺にもたらした役割を考慮する時、同文芸欄を運営していた「木曜会」共同体は当時の文壇——田山花袋『平面描写論』や島崎藤村『破戒』の成立と前後して勢力を伸ばした(硯友社的な技巧を否定する)自然主義文学の登場、それに前後して幕を開けた文学の「正しさ」の在り処をかけた党派間論争の時代(≒サロンの季節)——における文学的正統性を巡る争いのプレイヤー

として機能していたという事実が浮かび上がってくる。

彼らは漱石の死後も岩波書店と共同で『漱石全集』の編纂に当たって主要な役割を担い、漱石の遺品の管理に至るまで厳しく取り仕切っていた(江口 1989: 63)^{vii}といわれる。「第三世代」の弟子の一人である江口渙は小宮、森田、鈴木らの「第二世代」を漱石山房内における旧ジェネレーション(江口 1989: 66-67)^{viii}と位置付けている。

次章以降では、漱石門弟のうち、特にこの「第二世代」の弟子たちが形成していた集団を「『木曜会』共同体」と呼称し、その性質や漱石との関係性などを考察する。

表 漱石門弟の時代区分

	第一世代	第二世代	第三世代
漱石と師弟関係を築いた時期	1898年～1902年	1903年～1909年頃	1910年頃～1916年
学校制度的な師弟関係	あり	あり⇒なし (漱石が途中で大学講師を辞めるため)	なし
漱石との関係性	(寺田寅彦を除けば)学校制度に基づいた一時的な関係性	パーソナルかつ濃密 (「愛情」、「恋」という表現)	心理的な距離感あり (第二世代への批判的まなざし)
集団としての性質	一時的に発生し、消えていった学校内同人集団	一時期、朝日新聞文芸欄を拠点に党派性を帯びた論壇の一派を形成	作家としてのキャリアを歩んだものが多いが「第二世代」のような党派的な活動には乏しい

第2章 漱石と「木曜会」共同体の関係性

1906年10月の「木曜会」設置に伴って漱石が木曜日以外の来客面会を全て謝絶するようになったため、これ以後弟子たちは一応全員が漱石との時間を公平に分ち合うこととなる。だが「木曜会」設立前後の時期における漱石の書簡を確認すると、「木曜会」共同体に属する弟子たちが「木曜会」以外の場で漱石を巡る苛烈な争いを繰り広げていたとみられる事例には事欠かない。

例えば、弟子入り前の鈴木三重吉は当時ほとんど面識のなかった漱石に宛てて全長五メートル

ル以上にも及ぶ、漱石の人間性を絶賛した手紙を送りつける(森田 1980: 180-181,205)ことで一気に漱石の心を掴み、幼くして父と死別した小宮豊隆は書簡上で漱石に自らの「お父っさん」になってくれるよう真剣に懇願して断られている(森田 1980: 251-252)。また、森田草平は自らの身の上に関わる重大な秘密⁹を人生で初めて漱石だけに告白し、秘密の共有という形をもって漱石を独占しようとした(半田 2000: 108)ことが知られている。

森田草平はこのような弟子たちの漱石への感情を「パーソナルアフェクション」という言葉で表現しつつ(森田 1980: 253)、小宮、鈴木らの弟子が漱石のことを「自分の恋人のように思っていた」(森田 1980: 253)と述べ、小宮豊隆は漱石が『吾輩は猫である』を書きだしてから漱石の弟子となった自分たちの世代(=第二世代)について「猛烈に自己の感情を漱石の上に浴びせかけ、殆んど異性に対する情合のようなものをさえ、漱石に対して持った弟子たち」と書く(小宮 1987a: 29-30)など、森田と小宮は共に漱石と「木曜会」共同体との間に芽生えた関係性を、(単なる師弟の間柄を超えた)ある種の「愛情」(アフェクション)や「恋」のようなものであると主張している。国文学者の小森陽一は、「木曜会」共同体に見られるこのような性質について「ホモセクシュアリティもからんだような一種のホモソーシャルな関係」と評している(関口,小森,石原 2000: 35)。ここでいう「ホモソーシャル」とは、イギリスの社会学者、イヴ・セジウィックが著書『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』で提唱した、社会を占有する男同士の緊密な結びつきを概念化した用語である。

セジウィックはホモソーシャルの一般的な特徴としてミソジニー(女性嫌悪・女性蔑視)とホモフォビア(同性愛嫌悪)の二つを挙げるが、「木曜会」共同体に関してはそのホモフォビク性を主張する研究考察の類はほとんど存在せず、むしろホモセクシュアル性を指摘されることの方が多。

例えば荒正人は漱石と門弟との間にホモセクシュアルに近い感情が芽生えていたと指摘しており(荒 1982: 50-51)¹⁰江藤淳も森田草平と小宮豊隆の関係を、漱石を巡る「宿命のライヴァル」と表現しつつ、漱石の人物評価や作品解釈を巡る二人のせめぎ合いからは「一人の女を争う二人の男の息遣い」が感じ取られると述べ、さらに「漱石と門弟の間には一種ホモセクシュアルな雰囲気があったのではないかと主張する(江藤 1984: 14)など、「木曜会」共同体に見られるホモソーシャルについては、ホモセクシュアルとの断絶よりも、むしろホモセクシュアルとの連続性を認める考察が支配的であるといえるだろう。

ただ、ホモソーシャルのもう一つの特徴であるミソジニー(女性嫌悪・女性蔑視)については、これを漱石の妻、夏目鏡子との関係から見出すことが可能である。次章では「木曜会」共同体が漱石の妻、夏目鏡子へと向けた非難と嫌悪について分析を行う。

従来の漱石研究においては、漱石の門弟らによる共同体について、そのミソジニー性を指摘した研究は決して多くない。だが「木曜会」共同体のホモソーシャルのあり方を考える上で、ミソジニーに焦点を当てる分析は不可欠な要素の一つであると考え。

第3章 「木曜会」共同体と夏目鏡子

漱石が弟子に愛情を注いだ理由として、小宮豊隆と森田草平は共に漱石の家庭環境、特に妻、

鏡子との関係が険悪であったことを挙げている。家庭内で十分に愛を育むことができなかつた漱石がその想いのほけ口を弟子に振り向けたというのである。

「弟子たちの渴仰と愛情とが純粹でひたむきで、寂しい漱石に何か頼もしい感じを起こさせ、従って世に住むことを長閑やかに感ぜしめた」(小宮 1987b: 31)

「弟子どもが近づけば近づくほど、特に純粹な愛情に飢えていた漱石が、嬉しいことに思わないはずがない」(小宮 1987b: 31)

「先生は奥さんの先生でもなければ、天下の漱石でもなかつた。単に弟子どもの漱石であつた。弟子どもの所有であつた」(森田 1980a: 32)

代表的な漱石の作家・人物評伝として知られる小宮豊隆の『夏目漱石』では、「神経衰弱」、「再び神経衰弱」という二つの章を割いて漱石が患っていた精神疾患についての考察が加えられているが、この中でも小宮は鏡子がイギリス留学中の漱石に長期間手紙を返さなかつたことや漱石の心情を害するような文面の手紙を送りつけたことを繰り返して強く非難しており(小宮 1987b: 111-129)、イギリス留学以後の漱石の精神的疾患やそれに伴う家庭内暴力についても「鏡子の無理解と無反省と無神経から来ている」(小宮 1987a: 185)と述べるなど、ほぼ全責任を鏡子に帰している。森田は小宮に比べればやや鏡子に同情的ではあるものの、漱石の精神疾患や家庭内暴力については「もし奥さんがもう少し先生の心を汲んで先生の世話をしあげられたら」(森田 1980b: 261)と述べており、漱石の振るつた暴力への批判を行わず、夫の「心を汲まない鏡子にのみ反省を求める態度を取っている点に関しては、小宮と全く変わるところがない。

夏目漱石の妻、夏目鏡子が「悪妻」であつたとする、いわゆる「鏡子悪妻説」は、2018年の現在でも有名な逸話としてメディアなどで度々取り上げられているが、漱石の次男である夏目伸六は著書『父・夏目漱石』で「私の母ほど、天下の悪妻として喧伝されている女も珍しい」(夏目 1991: 284)と述べた上でこの「鏡子悪妻説」を真つ向から否定している(夏目 1991: 288)。伸六は「鏡子悪妻説」が流布した発端として、小宮豊隆が著書を通じて自らの思い込みに基づく誤った「鏡子像」を世に広めたことを挙げており、他の鏡子悪妻論者は「すべて巫流」であると主張している(夏目 1991: 284-285)。小宮豊隆が著書『夏目漱石』を発表し、その中で強烈な鏡子批判を展開するのは1938年のことであるから、伸六の主張に従うなら「鏡子悪妻説」の誕生は1938年以降ということになる。だが1916年に漱石の葬儀の場で鏡子と初めて対面した江口渙(「木曜会」メンバーの一人)は当時抱いた感想として「なるほど、これが漱石山房の有名な悪妻か」(江口 1989: 23)という印象を持ったと述べており、実際には遅くとも漱石の最晩年である1916年頃には「木曜会」内部で既に鏡子に対するネガティブな評価が共有されていたことがわかる。

「漱石+『木曜会』共同体」という男のみの空間であつた当時の漱石宅においては、女性であり、かつ漱石に最も近いポジションにいる鏡子の存在はそれ自体異質なものとみなされ、結果「木曜会」共同体にとって排除の対象になつたと考えられる。「木曜会」共同体のホモソーシ

ヤル性が、そのミソジニスティックな面を発動して鏡子を排斥したのである。

しかし、こういった形での女性排除は、セジウィックが『男同士の絆』の中で紹介しているミソジニーとは微妙に形態が異なっている。セジウィックは男性社会における女性のポジションについて「女性を排除するように見える関係—たとえば男性のホモソーシャルな関係や同性愛的関係—でさえ、その構造には女性の地位やジェンダー配置に関わるもろもろの問題が逃れようもなく深く刻印されている」(Sedgwick 1985=2001: 37)と述べており、一見女性を排除し、男性のみで運営されているかに見える共同体であっても、そこには女性の存在が必ず一定の関与を果たしていると主張している。

レヴィ＝ストロースは『親族の基本構造』において「婚姻を構成する交換関係のすべてを吟味すると、婚姻とは……ひとりの男とひとりの女との間に成立するものではないということがわかる。その関係は、男性からなる二つの集団の間に成立するのであり、女性は婚姻相手としてではなく交換される物のひとつとして姿を現す」(Lévi-Strauss 1969=1977-1978: 115)という主張を展開しているが、セジウィックはこのレヴィ＝ストロースの論を引用しつつ、男性同士のホモソーシャル共同体における女性を、「男同士の絆を維持するための溶媒」として機能する存在(その典型的な形態が男二人による女性の「交換」である)だと位置づけている(Sedgwick 1985=2001: 244)。男性は常に「憐み/軽蔑の対象となる女性を媒介にして、権力を交換したり互いの価値を確認したりすることができる」(Sedgwick 1985=2001: 244)存在であり、ホモソーシャル共同体のミソジニーは「男同士の女性の交換」によって浮かび上がってくるものであるという観点はセジウィックの『男同士の絆』を通底する基本的パラダイムともいえる。

だが、「木曜会」共同体に属する弟子たちにとって、鏡子は軽蔑され、排除される存在ではあったものの、交換される対象ではなく、この点において「木曜会」共同体のミソジニーはセジウィックが言及するホモソーシャル共同体のミソジニーとは性質が異なっている。

ここまで、漱石と「木曜会」共同体及び「木曜会」共同体と鏡子という二つの関係に着目しつつ、ホモソーシャルというキーワードに照らして「木曜会」共同体の性質を考察した。その結果、漱石との(同性間の)非常に緊密な連帯、(女性である)鏡子への嫌悪や排除という二点においては、「木曜会」共同体内部のホモソーシャル性が認められたが、ホモフォビア性の有無やミソジニーの形態などの点においては、イヴ・セジウィックによるホモソーシャルの定義とはやや異なる特徴が観察される結果となった。

第4章ではイヴ・セジウィックの説明によるホモソーシャルと「木曜会」共同体のホモソーシャル性の差異に注目しつつ、「木曜会」共同体の性質を「日本型ホモソーシャル」ないしは「明治期学生文化・知識人のホモソーシャル」という枠組みで捉え、その特質について考察を加えていきたい。

第4章 「木曜会」共同体と日本型ホモソーシャル

i 「日本型ホモソーシャル」概念の必要性

第2章と第3章では、「木曜会」共同体に見られるホモソーシャル性に注目しつつ、「木曜会」共同体と漱石の関係性及び「木曜会」共同体と鏡子との関係性についてそれぞれ考察を行い、結果「木曜会」共同体からは「さほど強いホモフォビアは観察されない」、「排除される対象としての女性である鏡子は交換される存在でない」など「ホモソーシャル」という用語の提唱者であるイヴ・セジウィックがホモソーシャルの大きな特性として挙げたものとはやや異なる性質が観察された。

しかし、セジウィックが『男同士の絆』の序章部分において、自らのホモソーシャルに関する議論が「あくまでイギリス社会の構造に焦点を絞って」いるものであり、「私の論が非ヨーロッパの文化や民族とどう関わるのか全く明らかになっていない」と断っている(Sedgwick 1985=2001: 29)点には留意が必要であろう。また、セジウィックはイギリス社会について考察した自らのホモソーシャル論について「文化を超えて当てはめたり、(さらに)普遍化したりすることは大変重要だけれども、その前にまず、各自が極めて緻密な分析を行う必要がある」(Sedgwick 1985=2001: 29)とも述べ、自らの議論の他文化への安易な当てはめにも警鐘を鳴らしており、セジウィックのホモソーシャル論をそのまま日本のホモソーシャル組織である「木曜会」共同体に持ち込むことが不可能であるのは明らかである。

たとえ「木曜会」共同体にホモソーシャル性が認められるとしても、その分析に当たってはセジウィックの著書に出てくる「イギリス型」ホモソーシャルとは異なる「日本型ホモソーシャル」、さらには「明治期日本の学生・知識人文化におけるホモソーシャル」といった、より対象を絞り込んだ枠組みで考える必要がある。

日本のホモソーシャルを考察するにあたってセジウィックの議論を安易に当てはめることの危うさは、日本のジェンダー・セクシュアリティ研究者である前川直哉によっても既に指摘されている(前川 2011: 218)²⁴⁾が、その前川は明治時代の学生男色に着目する研究を行うことで日本型ホモソーシャルの成立過程を解明しようと試みている。

ii 明治期学生文化における学生男色解体

前川は著書『男の絆 明治の学生からボーイズ・ラブまで』で明治期の学生文化について触れ、1870年代～1890年代頃までの日本の男子学生の中では男同士の肉体的接触を含む同性愛関係である「男色」が「男らしさ」の一環として認められ、憧れの対象にすらなっていたと述べている(前川 2011: 42)。

ただ、1900年前後からは、新聞・雑誌などで学生男色を「風紀の乱れ」、「墮落」として非難する「学生男色バッシング」が広がった(前川 2011: 50-52)ことや、1899年の「高等女学校令」公布とそれに伴う高等女学校の生徒(=女学生)の激増(前川 2011: 76-77)などによって、男子学生の中では女学生との異性愛が「男色」にとって代わるようになる。そして男子学生の文化から排除されていった学生男色は、1900年代前半には「男同士の恋」・「男の友情」という二通りのホモソーシャルの形態へと変質していったというのが前川の主張である(前川 2011:

140).

iii 「男同士の恋」と「男の友情」

まず、「男同士の恋」についてであるが、前川の説明によれば、これは 1900 年代前半にいわゆる「軟派」学生の間で流行したものであるという(前川 2011: 109)。例えば 1888 年生まれの小説家、里見弴は自伝的小説『君と私と』の中で自らの学生時代を振り返り、当時「一般学生の中に男同士の戀がヒドク流行っても居た」ことや、里見自身も日記に同性に対する恋情を書き連ねていたことを告白している(里見 1973: 211)。

1900 年代前半に「軟派」学生の間で流行した、これら肉体的接触を伴わない形での同性愛的行為(=男同士の恋)について、前川はこれを「男女間の恋の代替物」に過ぎないものであったと説明している(前川 2011: 109)。この時期には女学生の登場により、既に「結婚」という制度を後ろ盾とする異性間の「恋愛」が同性間の「恋愛」にはない社会的正統性を獲得しており(前川はこのプロセスを「ヘテロセクシズムの制度化」とも説明している)、「男同士の恋」は必然的に「まがい物」として周縁へと追いやられざるを得なかったというのである(前川 2011: 110-111)。

一方、「男の友情」は同じく 1900 年代前半にいわゆる「硬派」学生の間で広く受け入れられた関係性であるというのが前川の主張である(前川 2011: 136)。

この時期の代表的な評論家の一人であり、漱石の『吾輩は猫である』にも名前が登場する大町桂月は、1907 年に発表した『青年と煩悶』の中で男同士の親密な関係の重要性について触れ、「東洋の男色、西洋のソドミー。これが肉体的であれば、大いに不可なれども、之を精神的にすれば、十分に女性に代用するに足る也。元来、人は共棲的動物也。その共棲が、更に進んで意気の投合となる。かくて、刎頸の交わりとなり、断金の友となり、肝胆相照らすに至る」(大町 1980a: 393)と述べ、肉体的接触を伴う同性愛を厳しく排除しつつ、男同士の精神的な繋がり(=男の友情)の素晴らしさを説いている。

また、前川は旧制第一高等学校寄宿舎における寮歌について、1898 年～1902 年に作られた全 22 曲のうち、歌詞に「友」の字が含まれるのは 5 曲(23%)に過ぎないが、1908 年～1912 年に作られた 30 曲では歌詞に「友」の字が登場するものが 15 曲(50%)とその割合が倍増することを指摘しており、こういったデータからも大町桂月が称揚する「男の友情」がこの時期の「硬派」男子学生に浸透していたことがわかると主張している(前川 2011: 136-139)。

肉体的接触を排除した男同士の親密な関係性を賛美する「男の友情」主義は、一見すると「男同士の恋」との違いが解りづらいが、「男の友情」主義は、男が異性愛にふけることを強く批判する点において「男同士の恋」とは大きく異なっている。

大町桂月は 1908 年刊行の『青年時代』の中で異性愛にふける男子学生を咎め「女子にとっては、恋愛が全てである。男子にとっては、恋愛は人生の一部分であるに過ぎない。しかし、青年は往々にして間違え、恋愛がすべてであるなどと勘違いしてしまう。恋愛は、確かに自然の人情である。だからといって、恋愛こそすべてだと全力を注いで、女子と取っ組み合いしているのは、男子としての天職を忘れてしまっている」(大町 1980b: 106-107)と述べており、1906 年に『中学正解』に発表した「男性と女性」では「女性は愛する。男性は愛よりももっと大き

い、憐れみを持つべきである」(大町 1907: 128)という文章も残している。

「恋愛は女のするものであって、男が熱中するものではない」というこの考えは、この時期、大町の他にも長谷川天溪など様々な論者によって語られて、また当時の硬派学生にも受け入れられていたと前川は主張する(前川 2011: 123)。

異性間の恋愛を軽蔑する一方、男同士の(肉体的接触を排除した)精神的つながりの「純潔」さを強調する「男の友情」主義は、ヘテロセクシズムから逸脱しない範囲で男同士の絆を特権化する思想であったといえる。

iv 「木曜会」共同体にみる「男同士の恋」と「男の友情」

日本において「同性愛」という言葉が誕生し、また同性愛を「変態性欲」であるとみなす言説が噴出するのは大正時代以降のことであるといわれる(前川 2011: 141,146)が、1870年代～1890年代において流行していた学生男色(=肉体的接触を伴うホモセクシュアル)文化が、1900年前後の「学生男色バッシング」と女学生の登場によってその正統性を奪われ、1900年代には肉体的接触を伴わないホモセクシュアルである「男同士の恋」、「男の友情」へと変質を余儀なくされていく一連の流れは、明治から大正にかけての学生文化における同性愛文化解体の大きなプロセスの一部と見ることも可能である。第1章でも述べたように、「木曜会」共同体に属する第二世代の漱石門弟たち(当時、ほぼ全員が東京帝国大学に在籍)が漱石の元に弟子入りした時期は1903年～1909年であるが、この期間は「男同士の恋」と「男の友情」が男子学生間に浸透していた時期と完全に一致する。「木曜会」共同体の活動時期は、日本における学生男色文化が解体され、同性愛が「変態性欲」とみなされるに至るまでの過渡期的な時代にあたり、日本の学生・知識人文化圏において初めて「肉体的接触を伴わないホモソーシャル」という関係性が生まれた時期であるともいえるだろう。

森田草平、小宮豊隆らの弟子が漱石と自分たちの師弟関係にある種の「愛情」、「恋」であったと主張していることについては第2章で既に触れたが、先項(iii 「男同士の恋」と「男の友情」)での議論を踏まえて考えるならば、ここで森田や小宮が言う「愛情」や「恋」は、前川の言う「男同士の恋」に近いものであるといえるだろう。

漱石と門弟との関係を「ホモセクシュアル」という言葉で評する荒や江藤の説明は間違っていない。しかし、ここでいう「ホモセクシュアル」があくまで肉体的接触を伴わない「同性愛的感情」に留まるものである点には留意が必要であろう。

前川は明治期の学生文化に見られるホモソーシャルについて、ホモフォビアによる断絶ではなくむしろホモセクシュアルとの連続を指摘している(前川 2011: 218)が、「木曜会」共同体にも見られるこの傾向(=ホモソーシャルとホモセクシュアルの連続)は明治期日本の学生・知識人文化圏内におけるホモソーシャルの特徴の一つだといえるかもしれない。

また、「木曜会」共同体が鏡子に嫌悪を向ける理由については、「男の友情」主義に見られる、異性愛蔑視と男同士の絆の特権化によって説明が可能であると思われる。異性間の恋愛に比べ、「男の友情」を特権化する文化圏にいた門弟らは、自分たちの偶像である漱石に異性愛的なもの(鏡子との異性愛関係)を認めたくなかったのではないだろうか。

漱石 - 鏡子間の夫婦関係(≒異性愛関係)が漱石のカリスマイメージを削る結果をもたらすと考える立場からの発言としては、夏目伸六の著書『父・夏目漱石』も興味深い。この中で伸六は「木曜会」共同体の中核を成す門弟の一人である小宮豊隆の鏡子批判について「絶対の父(漱石)と俗物の母(鏡子)とを一对にしておのが祭壇に安置してみて、始めて、異質に悩まされる御神体が、何ともいとおしくてならなくなったのに違いない」(夏目 1991: 285-286)と評している。小宮をはじめとする「木曜会」共同体の門弟たちには単に漱石の業績を高く評価するのみならず漱石を人格的、人間的にも絶対的な存在として位置づけようとする傾向が見られることはこれまでも江藤淳などによって指摘されてきた(江藤 1984: 14)^{xxx}が、そのように漱石の「絶対」化を図ろうとする「木曜会」共同体の面々にとり、漱石が「俗物」でしかないはずの鏡子と「一对」の夫婦関係を結んでいたという事実は、それ自体漱石の「絶対」性を削り取り、彼のイメージを「俗化」させかねないものに映ったに違いない。鏡子による回想録『漱石の思い出』で描かれる、妻ならではの赤裸々かつ生々しい漱石描写に対しては、当初「木曜会」共同体側から相当の反発があったとも言われており(林原 1971: 318)^{xxx}、漱石の生前から死後にかけての長い期間、漱石イメージを徹底的に「俗化」させる存在として機能し続けた夏目鏡子という女性に対して、「木曜会」共同体が敵意を持ったのはむしろ必然ともいえるだろう。

v 女性弟子の視点から浮かび上がるもう一つの漱石像

夏目漱石の周辺人物による漱石評としてやや特異なものとしては漱石の女性門弟、野上弥生子による回想が挙げられる。野上弥生子は木曜会「第二世代」にあたる野上豊一郎の妻であり、自らは「木曜会」に出席しなかったものの、漱石に手紙を通じて指導を受け、1907年には漱石の紹介によってホトトギスに『縁』を掲載して作家デビューを果たすなど、自他ともに認める漱石の弟子である。彼女は1942年に発表した回顧録で「学校を出てから先生とお呼びしたのは夏目先生より外にはない」(野上 1942)と語っている他、生涯を通じて漱石に言及した「評論・随筆」、「序跋」を計五十作以上残すなど、1985年に99歳で没するまでの全生涯にわたって漱石に並々ならぬ思慕を寄せたことでも知られる。

それほどまで熱烈に漱石を慕ったはずの弥生子による漱石についての「語り」のあり方は、しかしここまで見てきた「木曜会」共同体の門弟たちによるそれとは大いに傾向が異なっている。

彼女が語る漱石生前の思い出の中で最も個性的なものの一つが、弥生子が漱石山房を訪れ、漱石に謡の本箱を贈呈した際の「風呂敷のしみ」エピソードである。箱を包む風呂敷に車夫の汗が垂れて出来た小さなしみを漱石が異常なまでに気にして、弥生子への礼を言うのも忘れて「こりやまずかったね」と繰り返し不平を述べたというのである。この事件に関して弥生子は「その日はたぶん先生の黒いデモンがとっついて、ご機嫌の悪い日であったのであろうと、あとから考えられました。先生のいわゆる狂氣的なもの」(野上 1981a: 399)と述べ、自身が漱石の「狂気」を目撃したと主張している。

この例からわかるように、弥生子は少なからず漱石の「狂気」について関心があったようで、漱石の死後、未亡人となった鏡子が成城の弥生子宅に泊りがけで遊びに来た際も、彼女は亡き漱石の「狂気」について鏡子から以下のような打ち明け話を聞き出している。

「たとえば奥さまが外出して、真っ暗になって帰ってくると、蚊がもうぶんぶんしているのに、灯りもなんにもつけないで、まだ小さかった長女の筆子さんと、部屋にじっとしている。ご機嫌でも悪かったのか何かで筆子さんを叱っていたらしく、そばにおいてじっと睨めっこをしていたんで、ちょっとこわかったというというような、そういうことを聞きました」(野上 1981b: 276-277)

弥生子は、この鏡子の話と弥生子自身が体験した「風呂敷のしみ」エピソードを合わせたうえで、以下のように総括している。

「それらは、先生の後年に強くあらわれた肉体的な異常さに通ずるものではないかと思えます。木曜会の席上では、そういう面は全然お出しにならず、むしろ温厚な紳士としてふるまっておられましたから、先生が変だなどと誰も思わなかったのでしょう。私がうかがったときに感じた一種異様な感じは、素のままの先生があらわれたのではないのでしょうか(中略)そういうことはきっと昼間のお客さんだの、夜の木曜会の若い連中などは知らなかったのではないのでしょうか」(野上 1981b: 277)

弥生子は「木曜会」共同体の門弟たちのような「鏡子悪妻論」へと流れて漱石という存在の聖性を図る立場を決して取らない。弥生子はむしろ鏡子側の主張に全面的に立脚する形で漱石の「俗」なる部分を暴こうと試みており、この時「木曜会の若い連中」(=「木曜会」共同体)は、鏡子の知っている「素のままの」漱石を知らない、あるいはその存在を隠蔽しようとする集団として位置付けられる。

弥生子は鏡子同様、ある意味で漱石と近い関係にありながら「木曜会」を巡る共同体からは排除された女性たちであり、彼女たちが結託することで提示される夏目漱石のもう一つの像、すなわち漱石の「狂気」と「暗部」は、小宮、森田ら「木曜会」共同体の男性門弟が映し出す絶対的な神聖さを湛えた漱石像の裏にある漱石の「影」の部分なのである。

おわりに

本稿では1903年～1909年頃に夏目漱石とパーソナルな師弟関係を結んだ学生たち(=「木曜会」共同体)の内部に芽生えた同性同士の緊密な関係性について、イヴ・セジウィックの『男同士の絆』におけるホモソーシャルの議論を参照しながら漱石の妻、夏目鏡子と「木曜会」共同体の関係性について考察し、その結果、鏡子が「木曜会」共同体にとって排除と嫌悪の対象となった過程から、「木曜会」共同体の(ホモソーシャル性に伴う)ミソジニー性を指摘することができる一方、セジウィックが定義づけるホモソーシャルにおける重要なパラダイムである「女性の交換」及びホモフォビアの要素は観察できないことがわかった。セジウィックが定義づける理念形のホモソーシャルと、「木曜会」共同体に見られるホモソーシャル性との間に見られるこのような差異を踏まえたうえで、「木曜会」共同体の活動時期である1900年代初頭における日本の学生文化やそれを巡る言説について検討したところ、異性愛蔑視と男同士の絆の特権化

を基調とする、ホモセクシュアルと一定の連続性を持つホモソーシャル性が、この時期の学生・知識人文化における日本の特性であることが明らかになった。

本稿では漱石の門弟を世代ごとに「第一世代」、「第二世代」、「第三世代」に分け、その中の「第二世代」について主に扱ったが、本稿で触れることのできなかつた「第三世代」について検討することが出来れば、明治期から大正期にかけて日本の知識人文化における師弟関係のありようがいかなる変容を見せたかについてさらなる考察を加えることが可能になると思われる。今後の課題としたい。

[注]

ⁱ⁾ P. ブルデュー『芸術の規則』では、フランスにおける自律化以前の「文学場」のあり様として、第二帝政期のサロンが例示されている。当時の文学者及びその他の芸術家たちはサロン内部における種々の拘束を受ける引き換えに、物質的利益(現金をもらう、劇場やホールで作品を上演してもらう、元老院のポストをもらう)、象徴的利益(官展への出品権、アカデミーや学士院の肩書など)の両方を貴族や皇室から直接享受していた。『芸術の規則』では、このように皇室のサロンに芸術家たちが囲い込まれている「文学場」の初期状態が示された上で、1848年革命の挫折前後から次第に「文学場」が権力場から独立的な価値体系(皇室をはじめとする権力的磁場からの承認ではなく、「文学場」内部における芸術の正統性を巡る闘争の勝敗が象徴的利益の獲得へと繋がる)を組織し、1894年のドレフュス事件時における「文学場」から権力場への逆介入の成功をもって「文学場」の相対的自律化が一つの達成を成し遂げるまでの流れが分析されている。一方フランスと異なり、日本にはそもそも「場」の初期状態として想定される、権力に囲い込まれた強力なサロン文化の類が少なくとも近世以前には存在しないため、日本の文学場について考える際にブルデューの示すような直線的モデル(権力による囲いこみから自律、さらに逆介入)を提示することは必ずしも容易でない。本稿では、それまで個別の作品に対する文芸時評が支配的であった文壇の批評空間が、「木曜会」共同体の登場に前後する時期に龍土会、パンの会などの党派性を持ったサロンの小集団間による、より抽象度の高い論争(＝文学における正統性を巡る闘争)へと移行したことをもって日本に「文学場」が誕生したと位置付け、「木曜会」共同体を、当時の文壇における文学的正統性争いのプレイヤーたる一党派と位置付けている。

ⁱⁱ⁾ 「吉村さん」とは吉村冬彦であり、これは寺田のペンネームである。

ⁱⁱⁱ⁾ 内田の1919年12月28日及び29日の日記に小宮を「漱石神社の神主のようで可笑的」と評する記述がある。

^{iv)} ここで江口は、漱石の臨終の言葉である「いま、死んじゃこまる」という言葉を、小宮が著書『夏目漱石』の中で故意に削除していると批判しているが、これは誤りである。「そのうち漱石が非常に苦しみ出し、自分の胸を開けて、早くここへ水をぶっかけてくれ、死ぬと困るからと言ったかと思うと、人事不省に陥り全く意識を失ってしまった」(小宮 1980: 315)という記述がある。

^{v)} 「巷間に行われている「則天去私」解釈なるものは、相当あやしげなものだということを意味する。漱石のソフィスティケーションに弟子達が見事にひっかかっているふしがある」、

「最も熱心な「則天去私」の祖述者の一人である小宮豊隆氏の『夏目漱石』も、同様の結果を招いた書物だといわざるを得ない。この評伝は漱石評伝の決定版であって、その精緻な考証は尊敬に値するが、いささか迷惑なのは氏が、このおびただしい貴重な事実を、「則天去私」の悟達を導き出すために、整然と合理的に配列しようとしたことである」(江藤 1984: 13)。

vii) ここで、森田は朝日文芸欄設立の理由について「弟子どもにも発表の機関を与えてやりたいという先生の親心である」と述べている。

viii) 漱石の葬儀の直後に久米正雄が漱石の書斎に遺されていた「書のかきつぶし」を持ち帰ったことに対し、小宮豊隆が強硬に久米を非難し、「かきつぶし」の返却を迫ったと述いう回想がある。

ix) ここで江口は、漱石の死後持ち上がった小宮・森田らと芥川・久米らの対立を「漱石山房内の新旧ジェネレーションの対立であった」と述べている。

x) この告白の具体的内容について森田草平は明らかにしていない。しかし江藤淳は森田の著書『煤煙』(本書には森田の自叙伝的著書という一面がある)の内容から、この告白の内容を、森田草平の父、亀松がハンセン病患者であったこと及び、草平はその父の実子ではない疑いがあることではないかと推測している(江藤 1993: 228,370-383)。

xi) 「中村是公などとの関係にはあきらかにホモセクシュアルなものがかんじられる。是公は、修善寺の大患のとき、漱石に錢を提供してゐるが、それを受け取る態度のなかには、親友への親愛感を超えたものがあるやうに思へる。漱石のこのやうな傾向は、後年「木曜會」のなかでもっと昇華された形で活かされてゐる」(荒 1982: 50-51)。

xii) ここで前川はセジウィックのホモソーシャル概念について「この概念は便利だけに、『日本はどのようにして、今のような性差別的な社会になったのか』という問題を、歴史に即して検証することの重要性を見失わせてしまうかもしれないのです」(前川 2011: 218)と述べ、セジウィックの理論をそのまま日本社会の分析に利用することの危険性を述べている。

xiii) ここで江藤は小宮、森田ら漱石の弟子たちが持っていた「師匠に対する性的な憧憬」が(漱石が晩年に則天去私の境地に達したとする)『則天去私』神話の発生原因の一つである(江藤 1984: 14)と述べ、弟子達による漱石偶像化の動きを批判している。

xiv) 「ところが、これ(『漱石の思い出』)に対して憤然として起ったのが小宮豊隆氏である。先生のための弔合戦と号して、極力自己の主観を抑へ、推測を排しながら、あの膨大な漱石伝を書き上げた」(林原 1971: 318)。

[文献]

石割透,2000,「〈漱石・芥川〉神話の形成 一枚の「新思潮」同人の〈写真〉から」『漱石研究』翰林書房. 13: 140-154.

森秀人,1963,「解説」『世界の人間像 13』角川書店.

三好行雄,1993,『近代文学史の構想』筑摩書房.

Bourdieu, Pierre,1992,Les règles de l'art,points (=1995-1996,石井洋二郎.,trans,『芸術の規則 I・II』,藤原書店.)

稲垣恭子,2011,『教育文化を学ぶ人のために』世界思想社.

熊本日新聞社,1982,『熊本県大百科事典』熊本日新聞社.

原武哲,海老井英次,石田忠彦,2014,『夏目漱石周辺人物事典』笠間書院.

森田草平,1980a,『夏目漱石(一)』講談社学術文庫.

———,1980b,『夏目漱石(二)』講談社学術文庫.

———,1980c,『夏目漱石(三)』講談社学術文庫.

夏目漱石,1928,「明治 42 年 11 月 28 日 寺田寅彦宛夏目金之助書簡」『漱石全集第 18 卷』(岩波書店).

内田百閒,1987,『新集内田百閒全集第七巻』福武書店.

江口渙,1989,『わが文学半生記』青木書店.

椎名：漱石をめぐる闘争

- 江藤淳,[1950]1984,「夏目漱石」『新編 江藤淳文学集成 I 夏目漱石論集』河出書房新社
- 江藤淳,1993,『漱石とその時代 第三部』新潮社.
- 半田淳子,2000,「誰が一番愛されていたか 『文鳥』が語る両性愛」『漱石研究』翰林書房. 13: 100-109.
- 小宮豊隆,1987a,『夏目漱石(中)』岩波文庫.
- ,1987b,『夏目漱石(下)』岩波文庫.
- 関口安義,小森陽一,石原千秋,2000,「鼎談 漱石を生きる人々」『漱石研究』翰林書房.13: 10-39.
- 荒正人,1982,「漱石の暗い部分」『夏目漱石 1 日本文学研究資料叢書』有精堂出版.48-62.
- 夏目伸六,1991,『父・夏目漱石』文春文庫.
- Eve Kosofsky Sedgwick,1985, *Between men : English literature and male homosocial desire*, New York: Columbia University Press. (=2001,上原早苗,亀沢美由紀,trans.,『男同志の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会.)
- Claude Lévi-Strauss,1969, *The Elementary Structures of Kinship*, Boston:Beacon press.(=1977-1978,馬淵東一,田島節夫,trans.,『親族の基本構造』番町書房.)
- 前川直哉,2011,『男の絆 明治の学生からボーイズ・ラブまで』筑摩書房.
- 里見弴,[1913]1973,「君と私と」『初期白樺派文學集』筑摩書房.
- 大町桂月,[1907]1980a,「青年と煩悶」『大町桂月全集第九卷 修養一』日本図書.
- ,[1908]1980b,「青年時代」『大町桂月全集第九卷 修養一』日本図書.
- ,1907,「男性と女性」『雑木林:桂月文集』博文館.
- 林原耕三,1971,『漱石山房の人々』講談社.
- 野上弥生子,1942,「その頃の思ひ出——師友のひとびと」『婦人公論』27-4.
- 野上弥生子,1981a,『野上弥生子全集第 22 卷』岩波書店.
- 野上弥生子,1981b,『野上弥生子全集第 23 卷』岩波書店.

(教育社会学講座 助教)

(受稿 2018 年 8 月 31 日、改稿 2018 年 11 月 22 日、受理 2018 年 12 月 21 日)

漱石をめぐる闘争

— 「木曜会」 共同体にみるホモソーシャルな関係性—

椎名 健人

明治・大正時代の小説家、夏目漱石と彼の元に 1903 年から 1909 年頃集った当時東京帝国大学在学中の門下生たちが形成していた文学サロンの共同体 (= 「木曜会」 共同体) を、日本で明治 30 年代からその形成と自律化を始めた「文学場」における党派の一つとして位置付けたうえでその共同体としての性質を、イヴ・セジウィックが『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』で提唱したホモソーシャルという枠組みを用いて分析し、明治末期から大正初期にかけての文壇及び学生・知識人文化圏内における社会的ネットワークの特質を社会学的観点から明らかにする。

Struggle Over Soseki Natsume: Homosocial Friendship in “Mokuyoukai”

SHIINA Kento

This study analyzes the community of pupils of Soseki Natsume, a novelist in the Meiji Period, using the homosocial framework in student/intellectual culture in Japan in the Meiji Period. During Soseki's lifetime, he had many pupils. This study concerns pupils of Soseki from 1903 to 1909, when he was a lecturer at Tokyo Imperial University. This study places the community of pupils of Soseki as one of sectional parties in the field of literature and analyzes the relationship between Soseki and his pupils using the homosocial framework proposed by Eve Kosofsky Sedgwick in “Between men: English literature and male homosocial desire” and examines differences in the nature of homosocial friendship proposed by Sedgwick and that observed in the community of Soseki's pupils. In addition, this study analyzes the nature of homosocial friendships in student culture from about 1900 to 1910, the nature of homosocial friendships in student/intellectual culture in Japan in the Meiji Period, and the nature of homosocial friendships in the Japanese model.

キーワード: ホモソーシャル, 師弟関係, 学生文化

Keywords: homosocial, mentoring relationship, student culture